曾根崎心中
冥途の飛脚

他五篇

近松門左衛門作

祐田善雄校注

「丹波与作待

大坂は曾根崎の森で実際にあった心中事件に材を取った「曾根崎心中」，数々の名文句でも知られる梅川・忠兵衛の「冥途の飛脚」のほか，「卯月紅葉」「堀川波鼓」「心中重井筒」夜の小室節」「心中万年草」と近松世話浄瑠璃中の傑作７篇を収めた。いずれも舞台の動きが充分に理解できるよう脚注等に工夫がこらされている。

黄 211-1
岩波文庫

曾根崎心中・冥途の飛脚　他五篇

1977年 9 月16日　第 1 刷発行 ©
1991年10月15日　第22刷発行

校注者　祐田善雄

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111(案内)

印刷・法令印刷
製本・桂川製本

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan
ISBN4-00-302111-8

岩波文庫

30-211-1

曾根崎心中・冥途の飛脚

他五篇

近松門左衛門作
祐田善雄校注

岩波書店

凡　例

一、本書には、近松世話浄瑠璃から、竹本筑後掾が演奏した正徳四年以前の作品七篇を収めた。

一、これを正本の形式から見ると、山本九兵衛・同九右衛門が八行本を出版した時代であるから、底本には同じ体裁の奥書を持つ山本版の八行本を選んで翻刻した。

一、本書では、近松浄瑠璃の構成を明らかにするために、次のような配慮をした。

改　行　底本には改行がないが、節章（ふしのしょう）の三重・ヲクリ・フシ、または一部のスエテなどで改行して段落をつけた。これらはすべて語りの上で、位を改める節章だからである。その基準は以下の通り。

1　三重（七種の三重）で改行。三重と三重返しは別行。

2　ヲクリ（七個のヲクリ）で改行。ヲクリとヲクリ返しは別行。返しの別行を省略している場合はヲクリの改行をするだけ。

3　フシまたは一部のスエテによる改行は次の様式による。

A　……フシ……（改行）地（又は地色）……

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

B ……フシ……（改行）フシ（ハルフシその他）……地（又は地色）……

C ……フシ……（改行）フシ（ハルフシその他）……

D ……フシ……（改行）歌（謡その他）……

E ……スエテ……フシ……（改行）地（又は地色）……

F ……スエテ……（改行）フシ……地（又は地色）……〔愁嘆が激しくて区切りになる場合〕

G ……スエテ……（改行）地（又は地色）……〔同右〕

4 特例として、改行の節章がない場合にも、構成を明らかにする便宜上、人物の登場退場で改行することがある。

また、これらの節章のうちで、段落にはならないが、一応区切りと認められる場合、または「　」の中の段落など、改行しにくいものには、…印で本文に区切りをつけた。

H ……フシ……中（ウ・バル）……詞……

I ……フシ……詞……

J ……スエテ……フシ……地（又は地色）……

K ……スエテ……地（又は地色）……

L ……スエテ……詞……

M　「　」の中のフシ又は一部のスエテ

ただし道行・節事（ふしごと）・それに準ずる歌舞の部分（準節事）のヲクリ・フシはメロディー本位であることが多いので別に扱い、構成を考えて改行した。…も同様である。

段　落　段落には形式段落（小段落）と意味段落（大段落）とがある。

形式段落は節章で形式的に改行した小段落で、脚注欄に１２３…の番号で小見出しを記した。意味段落は形式段落を意味のまとまりで集めた大段落で、脚注欄にⅠⅡⅢ…の番号で大見出しを記した。

構成表　各巻の巻頭に、右の大見出しと小見出しの構成表を掲げた。

一、本文の翻刻にあたっては、漢字・かな・反復記号・句点の用法など、すべて底本の姿を重んじたが、文庫本の性質上、読みやすくするために、次の諸点で手を加えた。

節　章　節章は、印刷の困難な墨譜（ゴマ点）は省略し、文字譜のみを記した。文字譜は、底本では本文の横にあるが、印刷の都合上、本文中にはめこんだ。そのために必ずしも正確といえない場合も生じた。特に漢字を宛てた場合など、本来かなの間にあった文字譜を、宛てた漢字の上に置かねばならなかったこともある。

「　」　登場人物の言葉には、あらたに「　」を施した。

字　体　漢字・ひらがな共に、すべて現行字体に統一した。「ハ」「ミ」「ニ」をはじめ、そ

れに類するものも現行字体に改めた。

（例）　ハ→は　　ミ→み　　ニ→に　　ゟ→まゐらせ候

宛漢字・ふりがな　底本はひらがなが多いから、適宜漢字を宛てて通読の便をはかったが、その場合、もとのかなは、ふりがなとして残した。

（例）　おつと→夫（おつと）　みやこ→都（みやこ）

もとから底本に施されているふりがなには（　）を付して、これと区別した。

（例）　真苧（まを）→真苧（まを）　番頭（ばんがしら）→番頭（ばんがしら）

底本のままでは読みにくい漢字には、あらたに最少限度のふりがなを施した。この場合のふりがなは歴史的かなづかいにより、（　）に入れて示した。

（例）　少（をと）→少（をと）　弥（いよ）→弥（いよ）

反復記号　反復記号「〳〵」「ゝ」「ゞ」は、すべて底本の用法を残したが、「ゞ」は「々」の形に改めた。

「　」・宛漢字・送りがなの追加など、あらたに手を加えた場合には、もとの反復記号をふりがなの位置において、底本の姿を示した。

（例）　こと」ゝ→こと」と　　いろざとゝ→色里（いろざと）と　　こゑ〳〵→声（こゑ）〳〵

ただし、次の「ゝ」は「〳〵」に改めた。

清濁　底本には濁点が少なく、半濁点はまったくついていないから、あらたに濁点・半濁点を補ったが、その場合、もとの清音をふりがなとして、底本の姿を残した。

泣々→泣く〳〵　此々→此の〳〵

（例）　立ては→立てば　こざる→ござる　かつはと→かっぱと

ただし、宛漢字のために、ふりがなに回った底本のかなは、もとのままとした。

（例）　しんへう→神妙　くといた→口説いた

また底本には、まれに濁点のついた漢字があるが、これはそのまま残した。

送りがな　底本のままでは、送りがなが不足のため読みにくい場合は、あらたに歴史的かなづかいによる送りがなを補って、右横に・印をつけた。

（例）　切て取たるが→切つて取つたるが　見合せ→見合はせ

一、脚注は劇文学としての理解に必要と思われる事項を記した。そのために次の記号を用いた。

番号　大段落はⅠⅡⅢ…　小段落は1 2 3…　注は一二三…

○　時の変化、舞台の移動、人物の登場退場を示す。ただし道行は場所の移動があっても○印を付けない。

〔　〕　登場人物の言葉のうち、筋の展開上必要な部分を抄出。特に仕込みや繰返しなど、筋の上で前後と関係ある項目は煩を厭わず記した。

長話・口説などの長ぜりふで本文を…で分割する場合には、〔　〕の中も…で分割して対応させたこともある。

↓　参照すべき注および補注の番号を示す。

＊　趣向、段落のまとめ、人物や舞台の説明、テーマやクライマックスなど、批評・解釈的な事項を記す。

一、底本および挿絵には、東洋文庫・天理図書館・東京大学霞亭文庫、横山正氏・信多純一氏・吉永孝雄氏の御所蔵本を使いました。ご許諾を得た各位に対し厚くお礼を申します。

一、文庫に斡旋していただいた野間光辰氏・中村俊定氏、長期にわたって温い理解を示された文庫の永見洋氏に深甚の謝意を表します。

一、本書は、日本古典文学大系『文楽浄瑠璃集』の成果を踏まえて、本文・脚注を構成本位にまとめたものでありますが、これを近松浄瑠璃に当てはめるために長期間の実験作業を必要としました。その間に安田富貴子・井口洋両君の変らない協力と激励によって作業の実を結ぶことができました。本文の翻字も両君の援助を得たものですし、脚注でも随所にその意見を取入れました。また道行については吉永孝雄氏の助言を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

目次

凡例
曾根崎心中……一一
卯月紅葉……五一
堀川波鼓……九五
心中重井筒……一三九
丹波与作待夜の小室節……一八三
心中万年草……二四三
冥途の飛脚……二八七

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert

補　注……三三五
近松の生涯……祐田善雄…三六七
近松世話浄瑠璃の起点……井口　洋…三七五
あとがき……野間光辰…三八三

曾根崎心中

上演　元禄十六年(一七〇三)五月七日(外題年鑑)

竹本座　近松五十一歳

演奏者　竹本筑後掾・竹本喜内・竹本頼母

人形おはつ辰松八郎兵衛・徳兵衛吉田三郎兵衛(第一図その他)(一補一)

種類　心中物

底本　八行二十六丁本(東洋文庫蔵)

山口大学蔵本を参照

八行二十五丁本(大阪府立中之島図書館蔵)で校合

挿絵は絵入本(原本焼失)

曾根崎心中（上巻）構成表

「曾根崎心中」には上・中・下巻の区別はないが（1補二）、本書では便宜上その区別をした

本舞台

生玉社内の場

付舞台（口上場）

Ⅰ　観音廻り

1　マクラ
2　順礼
3　道行（歌）
4　道行（手妻カラクリ）
5　キリ

Ⅱ　徳兵衛長話

6　徳兵衛登場
7　おはつ恨み言
8　徳兵衛言訳
9　打明け話
10　おはつ激励
11　返済の金

Ⅲ　九平次騙り

12　手形の騙り

Ⅳ　喧嘩

13　徳兵衛激怒
14　おはつ逃行
15　打擲

Ⅴ　自害の決意

16　徳兵衛弁明
17　自害の覚悟

観音廻りの場
時　元禄十六年四月六日朝から晩まで
所　大阪三十三所観音霊場
人　おはつ
舞台　付舞台
屏風手摺

生玉社内の場
時　四月六日昼
所　大阪生玉神社境内（社前・蓮池、第二図上段）
人　天満屋遊女おはつ（十九歳）
平野屋手代徳兵衛（廿五歳）
油屋九平次
丁稚長蔵・町衆・田舎客・駕籠舁き・茶屋の男

第一図

若衆清公中

▲辰松八郎右人口上

他者

人きゆう

壬松門左衛門

辰松八郎右衛門

试读结束：需要全本请在线购买： www.ert